

新井白石『折たく柴の記』を読む

中田喜万

二〇一一年度の当センター主催による読書会は、私の担当で、新井白石『折たく柴の記』を扱った。その大体の「ねらい」は後掲資料のとおりである。参加者は二九名。

日程も予定どおり、二〇一二年二月二十九日、三月七日、三月一二日の全三回で行われた。時間は毎回午後二時半～四時。毎週水曜日のようにとしたところ、三月一四日が東京女子大学の卒業礼拝に当たため、第三回だけ月曜日となる変則的日程が組まれた。

当初は、三回でテキストの巻の上・中・下をそれぞれ扱おうと考えたのであるが、それでは相当ダイジェストにしなければならぬ。下手に要約して折角原典にふれる面白みが失せてしまつては困るし、日本史の詳しい予備知識を要求するわけにもいかない。結局、冒頭から順次読み進めることにした。以下、各回の簡単な報告である。

第一回 二月二十九日

大雪のため交通機関が相当乱れる。早めに登校してスタッフと打ち

合わせするつもりが、雪道に足をとられながら大学に駆け込み、何とか定刻に間に合う格好になる。こんな悪天候ではさぞかし参加者が少ないだろうと思いつつ教室に入ってみれば、さにあらず、ほとんどの方が遅刻せずに出席であった。その向学心に脱帽である。

読書会では、恐縮ながら、参加者に少しずつ朗読してもらつた。その理由として、次の四点を挙げた。第一に、声に出して読み上げることによって、語調を味わい、また句読点等が正しいか確認できること（原文には元來句読点等が施されておらず、岩波版の編者によって補われたテキストを読むため）、第二に、それに関連して、黙読でわかつた気になって、意味をとらずに読みとばしてしまうことの防止、第三に、大脳生理学の教えるところによれば、言語理解は音声認識を通してなされるものであつて、文字情報を後頭葉の視覚野で処理するときも、実はその後に音声認識の部位を経てから言語として理解されるらしいこと、その点で音読は大脳の理解力の向上に有効と思われること（鉄道の指差称呼を想起したい）、第四に、皆で読み聴きすることに

よって、自分一人が理解するだけでなく、皆の理解に資する、それにもない互いに意見を述べあうきっかけにもなること（それが実は近代以前の日本でも重要な読書の仕方であったこと）、以上四点である。

さて、『折たく柴の記』冒頭は、白石が父母のことを回想し、さらに父の語りを通して祖父のことを述べる部分である。したがって、会話や心内語がしばしば複雑に入り組む。「」や「」のつけ方が読解の鍵になる。教材の編者によるそれは、残念ながら不適切な箇所があるため、そこに注意しながら進めた。「」や「」は、内容による判断もさることながら、敬語を使用しているか否かが有力な判断材料となる。

配布資料は、丸山眞男「歴史と伝記」（初出一九五〇年、『集』第四巻所収）からの抜粋など。また参考までに、拙稿「新井白石と徳川の政治」（荊部直・片岡龍編『日本思想史ハンドブック』新書館、二〇〇八年）。

第二回 三月七日

前回に引き続き、白石自身の幼少期と、父母の老境の思い出について（白石の父は非常に晩婚で、白石の誕生は父が五十七歳、母が四十二歳の時だったという。本書、五三頁）。政治史を中心とする一般的な歴史叙述ではなかなかふれられない、当時の武士の気風や習俗が具体的な場面に即して語られる。

これに関連して、比較的年配の参加が多かったこともあり、いわ

ゆる自分史のすすめを紹介した。新井白石の父母たちはこれといって歴史に名を残すような事績をあげたわけではないが、白石の抜群の記憶力と精緻な記録によって彼らのことが後世に伝えられた（例えば、父母が似たもの夫婦だったらしいこと。五六頁）。そのような叙述の積み重ねが、歴史を（そして人生への理解を）ずっと意味深いものにしてくれる。我々の人生も、必ずしも歴史的大事件・大事業に関わってきたわけではないけれども（いや平凡な人生を過ごせる方がむしろ幸せというべきかも知れない）、それを記録することは決して無意味でないのである。前世代から聞き覚えていることは、白石がそうしたように、文字にするべきである。また、自分の経験・記憶を子どもに説いて聞かせればその子どもが白石のように記録してくれるかという点、そんなことはほとんど期待できないのが世の常なので、自分の経験は自分で記録に残す必要がある。特に、高度経済成長の前後で日本社会は激変した。失われた生活様式・習慣がある。このことを、それぞれの立場から描くことは有意義に思われる（ちよっと前までは戦争経験の記録が要請されたが）。以上のようなことを述べた。

時間が終わった後、教材（二二頁）に関連して、参加者のお一人が、「自分が子どもの頃、出身地の東北では、囲炉裏の上に樽を組んで炬燵にしていた記憶がある」と指摘なさった。その後、松沢先生の出身地の信州でもそうであったことがわかった。

第三回 三月二日

あの東日本大震災から丸一年と一日のこの日、今回は白石が見聞した元禄大地震、宝永の大地震および富士山噴火を扱った。元禄時代の古地図を机上に並べ、江戸を襲った元禄大地震の発生当日の白石の足跡をたどった。教材に描かれているとおり、このとき湯島天神下にあった自宅から、日比谷公園の辺りにあった主家（甲府宰相）の屋敷までの往復である。彼の進路の途中、特に地盤の軟弱な場所は、家屋の倒壊があり、また液化化現象が見られたのであった。火災も所々で発生した。——そのようなことは、大震災を身近に感じる以前であれば、軽く読み過ぎしていたのではなからうか。丁寧に読むべきと思われた。熱心に予習してきた参加者が多かったようである。

白石も被災の当事者であるから、どうしても記録に混乱があるらしいこと、元禄と比べて宝永のそれが著しく粗略なことが、明らかになった。宝永について他の史料で補った。

また、このような天変地異の儒学的意味づけと、綱吉から家宣への政権交代の関係について、最後に私から補足説明した（「天命」の問題）。——ところで、東日本大震災からの復興がままならない今日、もしも東海・東南海・南海の三連動地震と富士山の噴火が追い討ちをかけたら、さらに莫大な復興費用がかかる。国家を維持できるだろうか。非常にも心もたなく思われるとともに、この時の徳川政権の強靱さを再認識させられた。

配布資料は、元禄二年版の江戸古地図「江戸図鑑綱目」（日本地図選

集1『元禄・文政・天保・明治 江戸大絵図集成』人文社、一九七六年による）のコピー、北原糸子編『日本災害史』（吉川弘文館、二〇〇六年）、『江東区史』（一九五七年、四〇四頁）、『横浜市史』（第一巻、一九五八年、六八五―六八七頁）、『国史大辞典』からの抄出など。

最終的に、巻の上を駆け足で読むだけにとどまった。お許しいただきたい。

終了後のスタッフ懇談で、前年に『福翁自伝』の校訂を遂げられた松沢先生から、比較文学によって自伝を分析する視角についてご教示を得た（佐伯彰一編『自伝文学の世界』朝日出版社、一九八三年など参照）。またスタッフ各位には配布資料の準備等、お世話になった。感謝したい。

古典の古典たる所以は、読むほどに一層読みこむ必要を痛感させるところにあるらしい。はたして『折たく柴の記』もそうであった。次の機会を期すことにする。